73 権現山古窯　加木屋町山之脇

平安時代のおわりから鎌倉時代にかけて（12世紀）、瓦や茶碗、小皿を焼いた窯があります。中世になると、こうした窯が知多半島の丘陵地に数多く築かれ、やきものの一大生産地となりました。窯の築かれたころは、加木屋あたりも焼き物を焼くけむりがたなびいていたことでしょう。

71 御林の地名　加木屋町御林

加木屋に「御林」という地名があります。江戸時代、このあたり一帯は尾張藩の領地で、山林はすべて藩が支配していました。その中でも、「不入御林」（入ってはいけない林）といわれるところは、農民の出入りが固く禁じられていました。もし、入って木を切ったりすると、本人は罰金を取られ、体を三日間もしばられたまま庄屋にあずけられるほか、庄屋はじめ村の人々も罰を受けました。加木屋の「御林」は、この「不入御林」であったところです。この南西の雉子山のあたりも御林でした。

74 美女ヶ脇の地名　加木屋町美女ヶ脇

加木屋町に「美女ヶ脇」という地名があります。平安時代の歌人、在原業平が東国への旅の途中、美しい女官をつれて加木屋を通りかかりましたが、そのとき、女官が疲れて歩けなくなってしまいました。業平は近くに宿を探して村人といっしょに看病しました。やがて、なおった女官とともにさらに旅を続けようとしましたが、女官はここで暮らす決心をしました。それから、この京都の美人が住んだところを「美女ヶ脇」と呼ぶようになったと伝えられています。

78 留木古窯　加木屋町留木

加木屋中学校から知多市の八幡に通じる道路の周辺に、平安時代のおわり（12世紀）から室町時代（15世紀）にかけて営まれた古い窯跡がいくつかあります。これらの窯では、茶碗、小皿、甕、鉢などの日常生活に使われた容器が焼かれ、その製品は全国各地に運ばれました。木立ちの中をよく探してみると、焼き損じた茶碗などの破片が散っています。

79 鎌ヶ谷池　養父町鎌ヶ谷

鎌ヶ谷池の周辺には、中世の古い窯跡がいくつもあります。鎌ヶ谷の地名は、もともと窯が多い谷といった「窯ヶ谷」からつけられたものと思われます。

大きい川のない知多半島の村々にとって、田畑に引く水を確保するには、池を造るしかありませんでした。このあたりは、江戸時代のころは寺本村（知多市）の土地でした。江戸時代のころ藪村（養父町）には池がなく水に困っていました。池を造るためには、当時、寺本村（知多市）の土地であったこの場所しかありませんでした。そこで、寺本村とねばり強い交渉を重ねて、正徳３年（1713）にこの土地を借り受けて、堤を築いて鎌ヶ谷を造りました。知多半島には、こうした溜め池がたくさんあります。東海市の中ノ池や大池も、田畑に水を引くための溜め池でした。

80 陀々法師の地名　加木屋町陀々法師

加木屋町に「陀々法師」という地名があります。陀々法師というのは、「だいだらぼっち」ともいわれる力持ちの大男です。この大男が渥美半島から三河湾をひとまたぎして、知多半島にやってきて、さらに、伊勢の海を越えて鈴鹿の山のほうへ行きました。そのときの足跡が、名鉄河和線の八幡新田駅の近くにあった池といわれ、この地に、陀々法師の名前がついたと伝えられています。